(25)　列島西南端の古墳と地域間交流
――南さつま市加世田（かせだ）・奥山（おくやま）（六堂会（ろくどうえ））古墳発掘調査――

橋　本　達　也

1．調査研究の経緯

日本古代国家の形成過程の特質を明らかにする上で，その社会的諸関係の考察に当たっては，多様な地域環境や社会的要因に目を向ける必要がある。発表者はその際に境界領域構造の変遷に関する研究が，その特質を顕在的に明らかにし得る可能性をもつと認識し，古墳築造南限域の調査研究を進めている。

これまで，その主たるフィールドは大隅半島においてきたが，比較研究には薩摩半島側の実態理解が必要である。とくに，南薩地域における古墳時代墓制の研究は欠かせない。このような意図をもって，2005年に古墳の発掘調査を実施した。

ここで報告する古墳は，1942年に「六堂会古墳」として学会に報告されたものである。以来，この名称で呼ばれてきたが，「六道会」の地名がやや離れた場所に存在するものの，現地に「六堂会」の地名は存在しないことが地元では以前から問題となっていた。そのため，今回の調査を経て地元市教委は当該地の小字名をとって名称を「奥山古墳」と変更している。

南さつま市加世田小湊所在の奥山古墳は，薩摩半島南部で唯一の石棺墓である。石棺墓は天草諸島一宇土半島など東シナ海沿岸南部に広く分布する古墳時代墓制である。

本古墳の石棺は1931（昭和６）年に地主が畑開墾中に発見し，1941（昭和16）年の藤森栄一氏来訪時に氏の指揮によって発掘調査が行われた。この調査により，蓋石上を角礫が覆うこと，頭位は西向きで石棺内が赤色に塗られていたこと，底石はなく粘土上に赤い土が敷かれていること，鉄剣・刀子・ガラス玉などの出土が略測図とともに報告された（土持鋤夫・住谷正節1942「薩摩万世町六堂会古墳」『古代文化』13－3　日本古代文化学会）。しかしながら，その後，再調査されることはなく，今日の研究資料として利用できるものではなかった。そこで，今回，石棺の再調査と墳丘構造の確認を目的として発掘調査を実施した。

2．奥山古墳の発掘調査

立地と環境　本古墳は，薩南平野の南端の南北に延びる標高約９mの低い尾根の先端上に位置する。周囲は低湿地となり，北側には砂丘が発達するラグーンの環境をよく残している。本地域の最大河川・万之瀬川の河口は北へ約１km付近にあったと考えられ，近くには後世の船つなぎ石などもあり，古墳時代にも周辺が入り江状であったと考えられる。すなわち，本古墳は薩南平野の入口である万之瀬川河口近くの入り江の丘陵上という眺望に優れ，目立つ位置にある。

石棺の構造と技術　石棺は長軸を東西にとり，長辺に２枚，短辺に１～２枚の板石を組み合せて造る。全長259cm，最大幅72.5cm，長辺内法200cm，西小口内法61cm，東小口内法51cmを測る。いずれの石材も高さは50cm以上あり，そのうち30cm程度を埋めている。よって石棺内の高さは20cm程度である。底石はなく，厚さ10～15cmの赤色土を敷き，さらに下は石材下端まで粘土で埋めている。

石棺長側石には，小口石を嵌め込むための抉りをつくり，そこに小口石を挟み込む。そのため，両者の間には隙間がなく，きわめて密着した状態を保っていた。長側石の継ぎ重ねには，両側の石に刳り込みをつくり，嵌め合せて重ねる。小口石は２石を内外に重ねて立てている。また，北西の長側石にはチョウナタタキ技法とみられる痕跡がある。

箱式石棺にみられるこのような技法は，上天草市千崎古墳群などに代表される天草諸島一宇土半島で顕著にみられるものである。奥山古墳周辺には他に石棺墓がなく，在地で石棺製作技術が存在したとは考えられないから，本古墳の石棺には当該地域の工人の石棺製作技術が用いられているとみられよう。

石棺石材　石材には，砂岩（長側石），安山岩（蓋石・両小口内側石，長側石），凝灰岩（両小口外側石）の３種が確認された。

長側石として用いられている砂岩は，石英質アレナイトである。安山岩および凝灰岩は薩摩半島でも入手

可能であるが，石英質アレナイトは薩摩北端の鹿児島県長島以北，とくに天草地域に顕著に分布する。すなわち，砂岩は搬入品，安山岩・凝灰岩は在地品の可能性が高く，石材を持ち寄り１つの石棺を造っているとみなされる。石材からこの石棺構築における天草－宇土地域の石工集団の関与は疑い得ない。

墳丘構造－墳丘区画溝と渡り土手－　石棺周辺の調査区では，近代以降に大きく削平し，かつ丘陵先端部を多量の土砂で埋めて地形を改変し，畑地を造成したことが判明した。築造当時の丘陵は現状よりも幅が狭く，先端はなだらかであったと考えられる。

石棺南側のトレンチでは，古墳墳丘を区画する溝を検出した。上部は削平されていたが，最大幅180cm，深さ55cm以上の溝が長さ5.6m以上にわたって残存し，弧状に巡っている。墳丘区画溝は尾根主軸中央部付近から東側斜面に向かって深さを増す。この調査区から墳形は円墳であると考えている。

石棺より北側では畑の造成土下に，地山削り出しのテラス面が存在することを確認した。東・西側は尾根が削り落とされ墳端構造は不明であるが，溝が巡る余地はなく，北側同様にテラス面が巡って墳丘を区画したものと考えている。墳丘南側の区画溝底と北側の墳端位置から，規模は直径約13.5mと考えている。

また，墳丘区画溝は尾根主軸中央部付近で浅くなり，そのやや西寄りの位置で終息して途切れる。この終息部はやや軟質で均質な土の上に，地山由来の礫混じり土を載せて強く固めて渡り土手を造っている。ただし，渡り土手より西側は大きく改変され旧状が遺存せず，十分追求できなかった。

土器の様相　墳丘区画溝内部からは，土器片が多量に出土した。おおむね土器は溝底部付近におかれたものが転倒し，流土で撹拌されたものとみられる。

整理中のため未確定ながら，高杯７～８，小型丸底壺５，壺１，甕１個体程度が確認できる。小型丸底壺３，台付小型丸底壺１，直口壺１は区画溝下層からは良好な状態で出土した。

また，小型丸底壺はいずれも底部中央に穿孔があり，高杯には杯部中央から脚部を貫通する穿孔や杯部側面に穿孔のあるものがある。いずれも焼成前穿孔で，一括の祭祀土器とみられる。その特徴から，これらは古墳時代前期後半に位置づけられる。

これらのうち，壺には在地系の成川式土器の影響がみられる。高杯や小型丸底壺などは在地生産が考えられるものの，非在地系の土師器であるとみなしてよい。この土器群は古墳祭祀にともなう要素としてもたらされた情報により成立したものと考えられる。その直接的な情報源はまだ検討できていないが，地域間交流がその背景にあることは疑い得ず，古墳祭祀の展開を検討する上でも重要な資料である。

３．列島西南端の古墳

薩南平野は縄文時代以来，鹿児島を代表する標識遺跡が継続的に営まれた地域である。しかしながら，今後，新たな古墳の発見が続くとは考えられず，非古墳築造地域といえる。南薩地域では奥山古墳以外に中期後半とみられる推定直径17.5mの円墳，指宿市弥次ヶ湯古墳が存在するが，当地域の主要な古墳時代墓制は指宿市成川遺跡で典型的にみられるような土壙墓群であろう。ほかにも海岸砂丘上の土壙墓・土器棺墓などが知られる。列島西南端の一般的な古墳時代墓制は土壙墓による集団墓に代表され，点的に古墳が嵌入するように現れるが，首長墓としての古墳墓制は導入されず，継続的な首長系譜も形成されない。

そのようななか，一時的な存在ではあっても奥山古墳が石棺墓であり，墳丘をもち，古墳祭祀も執り行っていたことが判明したことは古墳築造に関わる複合的な葬送観念，技術，古墳を必要とする当地域の社会的背景が存在したことを示しており注目に値する。

この古墳が築造される地域内での文脈を見出すとすれば，日本列島の南北を結ぶ海上交易拠点を掌握し，古墳時代社会に連なった南薩の地理的位置づけが大きな役割を果たしていると考えられよう。とくに，古墳築造に天草－宇土地域の集団が密接に関与していることが明らかで，その出現に地域間交流が大きな役割を果したことは疑いない。古墳時代前期後半にはとくに地域間交流が顕在化しはじめ，その集約によって薩南平野にも有力首長が現れたのではなかろうか。

薩南平野は南島へ向かう九州西回り航路において，農耕を基盤とする社会を形成した最後の平野である。また，南島から渡り来る最初の平野である。この平野の南端にある奥山古墳は，古墳時代南島交流の境界であり，起点に位置するのである。そこにこの古墳の存在意義があるとみたい。

奥山古墳は，古墳時代社会南西部の境界を画する象徴的な存在として築造されたものと考える。

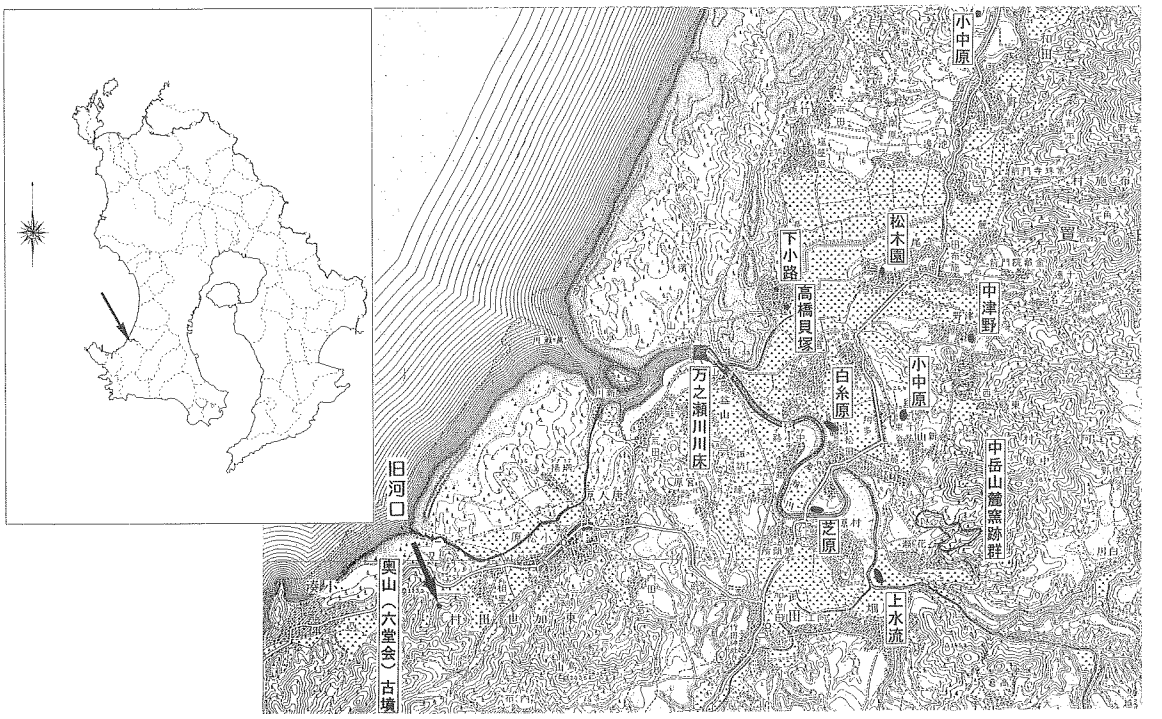

図１　奥山（六堂会）古墳の位置

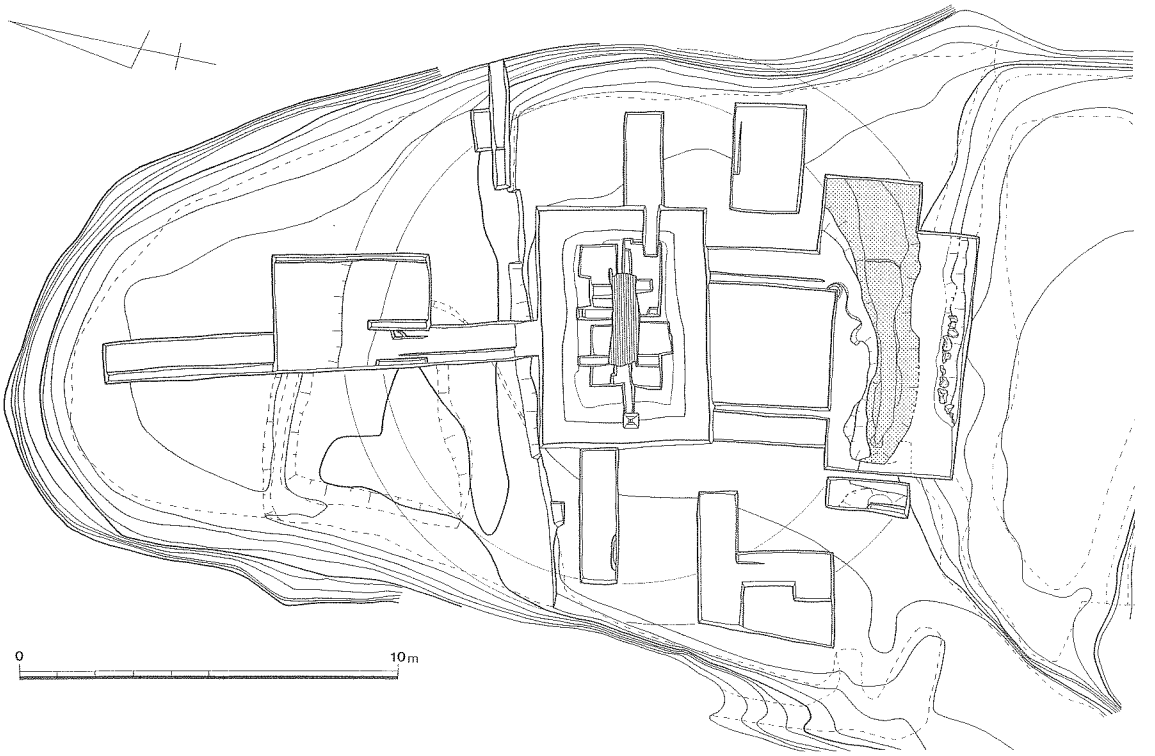

図２　奥山（六堂会）古墳

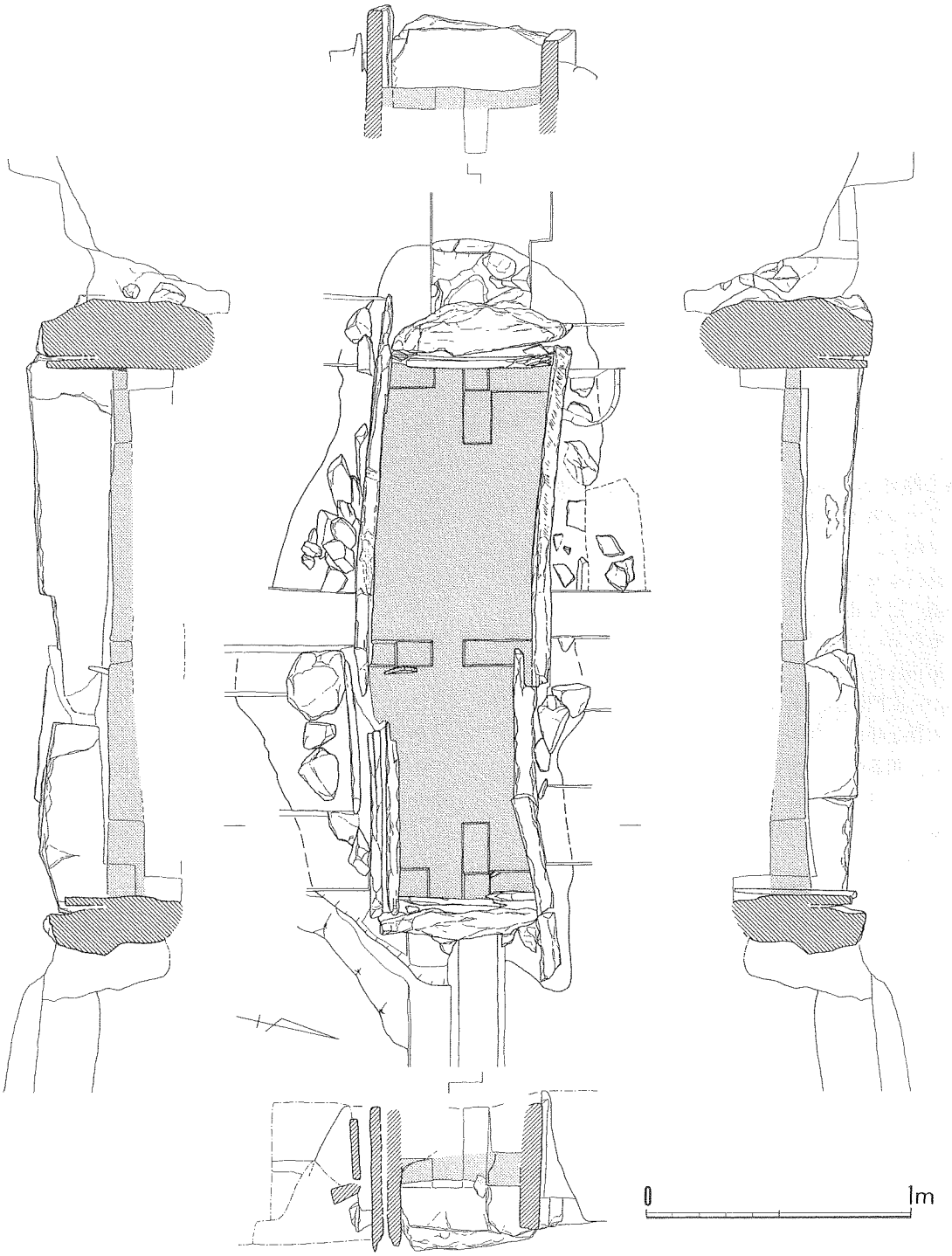

図3　奥山（六堂会）古墳石棺